

句

日

記

也

自

遠

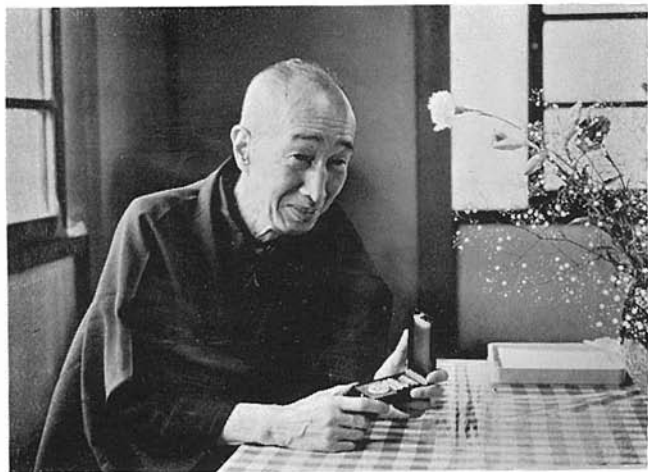
望



白  
日記  
送別

父母の靈前に捧ぐ





水也 甚四郎 (昭和三十七年六月写)









## 序

昭和九年六月八日の条を見ると、此時府内務部長藤岡玉骨氏紹介と余瓶君同行、野風呂先生初伺せし折の句として

螢 飛 ぶ 県 祭 に 丸 寝 せ し 水 也

私が昭和七年十一月から来客芳名録の水雲集第三卷（現在は五十二卷、石見半紙百枚綴すべて墨書）六月八日の条に

先生を敬慕入門せんとする友人池本水也君を案内して庵を訪ふ、軒近き吉田山の翠いよ／＼深し

見に来よとよく師の言へるこのゆすら 余 瓶

同日

予て志したる野風呂先生へ入門の日来り中田余瓶君と伺ふ、自分の技量より議論の方が先になり易く、中田君に水也危しなど、笑わる。

日向路

峠出て果なき灘の夏日哉

水也

の記事がある、私の三十余年続俳諧日誌（近く刊行）の同日条にもお迎えしたことを綴って居る、次で六月十八日

第二回に伺ひ先日の課題螢の御添削を受く、座に、白川大人居られ初のお近づきを願ふ。

水也

水也君とともに邪魔していろいろとお伺ひよき習得をせり。

生れし蛾はた／＼大地打ち匍へる

余瓶

余瓶水也両氏来庵の報に接し庵主のすゝむるまゝ居のこりて第二回句会に加わる、京都府庁去年藤岡玉骨君佐賀へ転じてうたゝ寂寥の感あり、今府会議長水也氏斯道に志さる

そくばくの螢放ちて客設

白川

これらの記事が残って居る、此時府会議長の要職にあつて、多忙ながら俳句に憩

い場所がほしかったことが判る。しかし此句集にある如く昭和六年よりの詠があるから、土地柄先考の影響もあり俳事に関心あったことはたしかで、私をたづねて下さった折は俳心勃々禁ずる能わざる時で、幸中学同窓の余瓶氏が昭和のはじめ頃より俳境にはいられ私と同信であったため、之も俳句好の玉骨氏の添書となったので、もう足かけ三十年になる遠い昔である、爾来代議士三期巨椋池干拓の畢生の大事業をなしとげらるゝ等、いく多公共事業に貢献せらるゝため、文字通り東奔西走席あたらゝまる閑なきにかゝわらず俳句諷詠を試みられ、私もその後いく度か句会吟行を共にした、句会は多くは多聞会後の春秋会に於て吟行は名勝月瀬梅林探勝宇治川上流の春興小倉行茶摘等京鹿子吟行には学校拝借につとめ下さる等心からなる親切に接したこといく度か、水也居句座にもいく度か参じて斯道の醍醐味を語りあつたことであつた。今回句集上梓に当り一通りの校閲と序文したゝむ依頼を受けよろこんでお引うけした次第、「袖の香」に収められ居るはよしとして、鞆盗難の厄にあわられた玉詠を見ることの出来ぬのは最も口惜しきことである。前書により句に依つて

公に身を奉仕し土地開発につとめられ併せて土地の文化興隆にも尽された一端をうかがい加えて俳諧の誠をも見落すことが出来ぬ。

祝句

句集成る巨椋干拓出来の秋

昭和三十八年九月十二日

鈴鹿野風呂

## はしき

これはわたしの自選句帖である。折ふし考えていたのを、兎も角出来上らせた。わたしと句との関係は、この小倉が昔から俳句に縁のあった処で、父も好んだみちであったし、それらの点からわたしは「門前の小僧」の還境にあった。愈々作句し出したのは昭和七、八年頃からで、爾来今日まで三十余年になる訳である。然しこの間熱中期というほどのものも無く、全体を通じて勝手気儘の間歇的であった。だから何年経っても句に進境無く、一と所を低迷というお恥かしい次第で、自分ながら今度自選して今更にそれを痛感した。それには中盛期に於ける相当長い間の府議や代議士生活などが、句道には一つの邪魔になったのかも知れない。然し所詮は不勉強の為という外はない。

さて、選句の標準である。元来がつまらぬ句群の内から、又句の良し悪しより寧ろそのバックになった生活感覚を主とした、その一々がわたしには多く捨て難いも

中  
略

昭和六年

橋立行、岡田啓治郎君

六月未 薰風に橋北の雄の髯ゆらぐ

昭和八年

大和藤岡長和氏嚴父葬、歸途吉野

四月 虚無僧のみち聞きみたり花の山

長女裕子、生後三ヶ月

五月 金魚鉢に天瓜粉の児の真顔なる

九月一日 月の川床昔ながらの煙草盆

夕涼

あながちにねたむならねどさゝめ言聞く心地せし鴨のせゝらぎ

山上周吉君来宅、夜更歸去

二日 出がらしの茶なり夜更けて虫の声

鴨川

十一日 比叡を背に障子洗ひの一人かな

今村啓太郎氏村葬

十八日 雁一羽別れて池の秋暮るる



高台寺

二十一日 茶屋の灯の一つ明りや萩の径

御所御着

十月二十二日 菊薫る日ざしまばゆき御幸かな

拝謁

二十三日 秋晴や紫寝殿上鳥の声

丹後故宮崎左平治氏へ墓参

十二月三日 墓参して菊稍老いし日和かな

昭和九年

府会民ク新年会

一月十二日 且那樣と呼ばれて高座己が春

農学校卒業式

二月五日 田を強く打つや愛宕に残る雪

大塚喜太郎君明治新聞社復帰

三月八日 帰り来てうれしからずや春炬燵

大阪中座にて二年振中谷安子さんに会ふ

会へばまた昔話や桃の酒

裕子初誕生日

十六日 初雛に母の膝より片言葉